

# KALS NEWSLETTER 67

2023年8月  
九州アメリカ文学会  
事務局 福岡大学人文学部 大島由起子研究室  
福岡市城南区七隈8丁目19-1  
〒814-0180

## 自己の内なる声を聞く

小谷耕二（九州大学名誉教授）

本NEWSLETTERの前号で報じられたとおり、KALSの元会長、野口健司先生が昨年12月26日に逝去された。かつての同僚として、また先生の会長在任中に事務局運営のお手伝いをした者として、この場を借りて長年のご厚誼、ご指導に感謝するとともに、謹んで哀悼の意を表したい。

野口先生が本学会の発展に関して成された功績には多大なるものがあるが、なかでも特筆すべきは事務局運営のローテーション化であろう。それまでずっと九州大学にあった事務局を、福岡女子大学、福岡大学、西南学院大学を加えた4大学で3年ごとのローテーションで移転していくことにしたのである。それとともに会誌の編集も北九州地区と熊本地区とで持ち回りで分担することにした。そのおかげで事務局の負担が減少し、結果的に学会活動がいっそう充実していくことになったと思う。これは大局を見通したうえでの野口先生の英断であった。

そうした大局的なまなざしとともに、野口先生には意外にも（失礼！）繊細なところもおりだった。学会運営の細部へのこまやかな目配りを補佐役としてしばしば感じたものである。ご著書『アメリカ文学と「語り」——白鯨からポストモダン文学へ——』のなかで、先生は学生時代、肺に病いをかかえた文学青年であったことを告白されている。病気ゆえに主治医に言い渡された、いまにも壊れかねない「ひびの入った茶碗」としての自己意識が、その繊細さの根っこには横たわっていたことであろう。

私的な話で恐縮だが、文学青年といえば、恥ずかしながらじつはわたしもそうで、大学在学時に同級生数名と各自手書きの文章をコピーした原稿を集めてホッチキスで束ね、小冊子にしていた。過去のメモ帳をみると、号数にして12号まで出していたようだ。その友人たちと還暦を機に、今度はきちんとした活字印刷で同人誌を出すことになり、現在6号まで発行している。そこに掲載した自作の小説を読み返してみて、なぜこんなことを書いたのだろう、なぜこんな場面が思い浮かんだのだろう、と不思議に思うときがある。もとより素人の習作の域を出ないものではあるが、たぶん自分が気づいていない自己というものがある、書いたものをおしてそれが滲みでてくるのだらうと思う。

そうした自分を越えた自己の表出のプロセスが、たとえばカナダの作家 W. P. Kinsella の *Shoeless Joe* (1982) には端的に表現されているのではないかと思う。映画 *Field of Dreams* (1989) の原作となった小説である。アイオワでトウモロコシ農場を営んでいる主人公兼語り手 Ray Kinsella はある日どこからともなく “If you build it, he will come.” という声を聞く。経済的負債をかかえこむことになるのにもかかわらず、その声に導かれて、彼はトウモロコシ畑をつぶして野球場をつくる。そこに、1919年のメジャーリーグ・ワールドシリーズで八百長事件に関与したかどで野球界から永久追放された、実在の「シューレス」・ジョー・ジャクソンはじめホワイトソックスの選手たちが集うことになる。そればかりか、隠遁したあの J. D. Salinger (メジャーリーグでプレーする夢を抱いていたという設定になっている。映画では黒人作家 Terence Mann として登場) や、これも実在した Archibald “Moonlight” Graham (メジャーリーグで1イニングだけ守備につくが、打席に立つことはなかった)、それに存命しているなかで最古参のカブスの選手だと自称している Eddie Scissons といった人物たちが絡んで、現実と幻想が混然一体となった物語が展開する。思想的には60年代の対抗文化を具現し、技法的にはメタフィクショナルなポストモダン風の商品である。また探求型のロード・ナラティブ的要素も見てとれる。

レイは自己の内なる声に従うことによって、挫折を経験した者たちが現実とも幻想ともつかぬ空間のなかで夢をかなえることを可能にするばかりか、若い頃に衝突したまま亡くなってしまっていた父 (シューレス・ジョーのチームのキャッチャーとして出てくる) との和解も果たす。アイオワのトウモロコシ畑のなかの球場は登場人物たちにとっては「癒しの空間」であり、同時にレイ自身の自己実現の場ともなっている。それは、自分のなかの未知の領域を取りこむことによって、いわばユング的な全体的自己が表出する物語となっているとも読めそうである。

野口先生に話を戻すと、先生は水彩画をよくものしておられた。とくに故郷久留米の耳納連山を背景とした田園風景画には、昭和世代の人間にはどこか観ていてほっとするような穏やかさが感じられる。吉野弘の「祝婚歌」のなかの詩句「生きることのなつかしさ」に一脈通じるような世界が描きだされているように思う。こうした絵を描いているときには、先生は俗事を離れ、それこそ「無理な緊張には／色目を使わず／ゆったり ゆたかに／ひかりをあびて」おられたのではないか。そう勝手に想像している。先生は「漱石の見た耳納連山」というエッセイを書いておられるのだが、漱石にとって漢詩の世界がそうであったように (江藤淳『漱石とその時代』)、水彩画は、先生の秘めたる繊細さ、自己の内なる声が呼び寄せた「癒しの空間」となっていたのではないか、とうれしく思う次第である。

蛇足をひとつ。いつだったか、久留米のデパートで催された野口先生の水彩画の個展を同僚何名かで訪れたことがある。そのさいにわたしが耳納連山の風景画のひとつを気に入っていると伝え聞き、後日先生から絵をプレゼントする旨の電話があった。立派な額縁に入れたものをいただくことになったのだが、わたしの気に入っている絵には先約があり、「阿蘇の根子岳でいいね？」とのことだった。もちろん異存はなかったが、そのとき「イヌもください」と言ったような、言わなかったような、…いくら何でもそこまで不躰ではなかったと思いたいのだが…。

## 地区だより

### 《沖縄地区》

加瀬 保子 (琉球大学)

琉球大学の加瀬保子です。最近、沖縄はかなり長い間台風6号の来襲に晒されまして、多くの人々が停電、断水、物資不足などで大変な思いをいたしました。九州の皆様も強風や大雨で不安な思いをされたと思いますが、大丈夫でしたでしょうか？以下、沖縄地区会員の最近の研究活動を報告させていただきます。

琉球大学の小林正臣先生の論文が日本アメリカ文学会の会誌 *The Journal of the American Literature Society* No.22 に掲載されることとなりました。タイトルは"The Sciences and Beyond: On Nonhumanity in *Moby-Dick*"です。この論文において小林先生は、『白鯨』における新たなアプローチを追求するために、社会科学と自然科学からアクターネットワーク理論とクジラ学を援用しながら、学際的研究を行うという意欲的な取り組みをなさっておられます。

加瀬は、今年1月に開催されたMLA年次大会で、アジア系アメリカ人作家の様々な災害についての文学的レスポンスをテーマとしたパネルに参加したのですが、その際、アメリカの学術図書出版社 Vernon Press からお声がけいただき、このパネルのテーマでアンソロジーを編集させていただくことになりました。タイトルは *Emerging from the Rubble: Asian/American Writings on Disasters* となる予定で 2025 年の出版を目指しております。私自身も、中国系アメリカ人作家 Ling Ma の *Severance* で一章担当させていただきます。また、来年1月フィラデルフィアで開催されるMLA年次大会でも "Biopolitics, War, Medicine" というパネルにオーガナイザー、司会者、また発表者として関わるようになっております。今回は Smith College や Oxford University の研究者も加わり、19世紀から今世紀までの医学と戦争の複雑な関係をライフ・ライティング、小説、詩など様々なジャンルの文学作品の分析を通して議論していくパネルとなります。ここ何年かコロナ禍でMLAにはオンライン参加が続いておりましたが、久しぶりに対面で発表できるので、大変嬉しく思っております。

### 《鹿児島地区》

千代田 夏夫 (鹿児島大学)

鹿児島からのお便りです。森孝晴先生 (鹿児島国際大学) からは以下のご報告を頂戴いたしました。大きなプロジェクトを進めておられるご様子、ご発表が楽しみです。ご翻訳のご上梓にも改めてお祝い申し上げます。

.....

森は、昨年末以来アメリカ人研究者や山口大学の先生との共同研究を進めています。まだ内容は明らかにできない (次回にはご報告できるかもしれませんが) のですが、鹿児島国際大学では教員二

人（一人は別の専門）と私の指導する博士課程の学生が参加しています。なお、7月1日付で、『ジャック・ロンドンの日露戦争従軍記（上）』が出ました。ロンドンの従軍記の翻訳でまずは全体の半分です。教え子の戸川聖也君との共訳で残りも出す予定です。

.....

千代田は9月2日関西学院大学梅田キャンパスで開催される F. スコット・フィッツジェラルド協会全国大会にて発表予定、タイトルは「馬を洗はばーイーディス・ウォートン『火花』と F・スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』における動物と人間」です。2021年 KALS 年次大会シンポジウムの成果を活かしてゆければと考えています。

## 《熊本地区》

楠元 実子 (熊本高専)

新型コロナに寛容な状況となり、外出する機会も増えてきました。海外旅行に行くメンバーも出てきました。しかし、私の勤務校では、いつも学生の誰かが感染している状況なので、まだマスクは手放せません。熊本アメリカ文学研究会でも、引き続き対面と Zoom のハイブリッドで例会を続けています。Zoom 開催を維持することによって、会場に足を運ぶことができないメンバーも会に参加ができるようになったのは、コロナ禍の副産物かと思っております。思う存分アメリカ文学について話合うことができる機会を私たちは楽しみにしております。さて、前回報告しました以降の研究会の活動を報告致します。

○第 161 回 (2023 年 2 月 18 日) Zoom/熊本大学にて

題目： 天才詩人 Emily Dickinson の詩を読む——苦悩と歓喜のはざま

発表者： 馬渡 美幸

司会者： 池田 志郎

\*デッキンソンの詩について、死、自由、スタイル、天才性など 4 つの切り口から詩を読み解いてくださいました。丁寧な説明のおかげで詩に書いてあることが理解でき、デッキンソンの強い意志と冷静な見方、芸術家の凄み、詩の持つ解釈の深さに大変興味がわきました。ハヤシ先生直伝の馬渡先生による詩の呼吸を感じさせる読み方も勉強になりました。参加者とのやり取りでは、セルフリライアンス、苦悩の先にある歓喜などというキーワードが出て、彼女の作品がポジティブなイメージになったという声も出ていました。その後、映画等の話題となり、映画『静かなる情熱 エミリー・ディキンソン』を早速私も視聴し、カエルの詩に喜んだり、南北戦争の頃の当時の様子に想いをはせたりしました。アップル TV で『デッキンソン～女性詩人の憂鬱～』というドラマもあり、こちらもまた違ったデッキンソン像が描かれています。

○第 162 回 (2023 年 4 月 22 日) Zoom/熊本大学にて

題目： ハーン「赤い婚礼」に見られる新時代の波と経済学

発表者： 池田 志郎

司会者： 楠元 実子

\*ハーンの「赤い婚礼」は実際あった鉄道自殺の記事をもとにした明治時代の若いカップルの心中の

話ではありますが、鉄道やお金中心の豊かな新しい時代の描かれ方について、士族と商人の価値観の対比、西洋と東洋の比較、愛についての考えなど、テキストに沿って丁寧に解説くださいました。赤い婚礼の「赤」が指すもの、価値観の移り変わり、女性のたくましさ、ロミオとジュリエットや曾根崎心中の心中について、死んで語り継がれる効果など、多様なトピックでフロアとのディスカッションが弾みました。様々な視点で変化や対比を読み取ることができる作品であることを知り、ほかのハーン作品にも興味がわきました。

○第163回（2023年6月17日）Zoom/熊本大学にて

題目： Taylor Jenkins Reid 作 *Seven Husbands of Evelyn Hugo* の重層性

発表者： 池田 志郎

司会者： 楠元 実子

\*現在39歳のテイラー・ジェンキンスリードの2017年発表の作品についてのご発表でした。400頁近い作品ですが、読みだすと止まらない面白い作品で、人種、暴力、性差や男女の役割、貧困、見かけ、愛、親子関係、LGBTQ などたくさんのテーマが盛り込まれていました。主人公のエヴリンがどのような生き方をしてきたか、逆境にある女性がどのように自己を作り上げていったかをテキストから読み取り、重層性の視点から解説いただきました。特に作り上げるイメージや隠された真実、主体性を持つようになる女性の生き方が印象的でした。エリザベス・テイラーやマリリン・モンローなどの実在の女優の人生に対しても、この作品の読了後は見方が変わったように思いました。フロアからは、タイトルが指すものと実際のストーリーの違い、当時のレズビアンの問題、日本の結婚観との違い、エスニシティや人種の描き方などが指摘され、とにかく新しい作品であるということで全員が同意しました。今後ネットフリックスでどのように解釈されて映像化されるのかが楽しみです。

なお、次回の会は Sherwood Anderson の *Winesburg, Ohio* の "Tandy" についてで、9月23日に開催予定となっています。ご関心がある方は、メールで楠元 (kusumoto@kumamoto-nct.ac.jp) までご連絡ください。

## 《佐賀地区》

名本 達也(佐賀大学)

佐賀地区は、鈴木繁先生と交替して、今年から2年間、名本が地区委員を担当させていただきまます。早瀬博範先生が佐賀大学をご退職され、西九州大学にいらっしゃった渡邊真理子先生が転出されて以来、佐賀地区でアメリカ文学を専門とするのは、鈴木先生と私の2名だけの状態が続いております。少し明るい話題といたしましては、佐賀大学教育学部に、吉村圭先生（ご専門は英文学）が昨年2月にご着任されたことでしょうか。

それから、実現する可能性は極めて低いことは重々承知しておりますが、ひょっとすると九州地区でアメリカ文学のマンパワーが最も小さいという汚名を返上できる機会が訪れるのではないかと、最近、あることに淡い期待を寄せております。実はこのご時世ながら、佐賀県には、これから5

年内に2つの大学が開校予定です。それぞれの大学にアメリカ文学者が着任してくれるのではないかと、妄想は膨らむばかりです。

## 《北九州地区》

齊藤 園子 (北九州市立大学)

北九州地区からは、まず北九州アメリカ文学研究会のご報告です。今回も薬師寺元子先生より直接次のお便りを頂戴いたしました。

北九州アメリカ文学研究会の活動について2件ご報告いたします。

### (1) 第18回研究発表会

日時：2023年3月4日(土) 14:00~17:00

会場：北九州市立大学 北方キャンパス 本館D-301

#### [研究発表1]

論題：Mark Twain のメニッポスの風刺と「嘘」の倫理

—短編“Was it Heaven? or Hell?” (1902) を中心に—

発表者：前屋敷 太郎 (九州共立大学講師)

司会者：谷山 知子 (立花高等学校非常勤講師)

#### [研究発表2]

論題：レオ・トルストイ文学の読書観

—『戦争と平和』・『アンナ・カレーニナ』を含め11冊より—

発表者：乗口 眞一郎 (北九州市立大学名誉教授)

司会者：薬師寺 元子 (北九州市立大学非常勤講師)

前半は、意気込み溢れる前屋敷先生が、ギリシャの哲学者メニッポス(紀元前3世紀)の名に因んで名付けられた「メニッポス風刺」という言葉を通して、Mark Twainの短編「天国?それとも地獄?」の中で、家族を守るための「嘘の倫理」について論じられました。後半は、乗口先生がロシア文学について朗々と興味深くご説明下さいました。特に、ロシア文学を代表する作家、トルストイとドストエフスキーの生涯を比較しながら解りやすく論じて下さいました。質疑応答の時間が割愛されましたが、興味深い知識が満載で、とても充実した学びの時間を過ごすことができました。

### (2) 『北九州アメリカ文学』(Kitakyushu American Literature) 第9号

2023(令和5)年4月30日発行

投稿数は例年には至りませんでした。何とか発行することが出来ました。編集委員長の乗口眞一郎先生、編集委員、投稿者の皆さんに心より感謝申し上げます。

2023年8月11日 薬師寺 元子

そのほかですが、まず江頭理江先生のご企画によるアメリカ文学シンポジウム「アメリカ文学と終末論的想像力」が7月16日(日)14時~17時に北九州市立文学館で開催されました。北九州市立文学館は小倉北区にある文学資料館です。北九州市立文学館は、隣の北九州市立中央図書館とともに磯崎新氏の設計で、アーチ形の天井や円形のステンドグラスが印象的な、半円筒の空間が広がる建物です。本シンポジウムは、このもの柔らかな空間にて、慶応義塾大学名誉教授の巽孝之先生をお迎えして開催されました。KALSからは鈴木一生先生、城戸光世先生が登壇され、その登壇者の輪に齊藤も加えていただきました。壮大なテーマでしたが、先生方の多方面からのアプローチを伺い、アメリカ文学を捉え直す貴重な視座を得る機会になりました。KALS 会員もたくさん参加され、巽先生を囲んでの楽しい意見交換の場にもなりました。

次に、北九州市立男女共同参画センター・ムーブ主催のムーブフェスタでの出展についてです。齊藤ゼミでは今年も「若者と描こう！ジェンダー平等の未来予想図∞」を出展しました。出展日はアメリカ文学シンポジウムの前日となる7月15日(土)でした。2021年度から二年間にわたって推進した北九州市立大学学長選考型研究費によるプロジェクト「国際的な取組みへのコミットメントを通じた本学におけるジェンダー平等(SDG5)の推進」を継承した企画です。今回は「米国作家 Kate Chopin を読む——読書会ワークショップ」と題し、Chopin の短編“The Story of an Hour”の読書を踏まえて、ジェンダー平等について参加者と一緒に考える機会にしました。学生による日本語訳と読み方の紹介に続き、グループディスカッションを行いました。参加学生からは、物語の理解が深まった、ディスカッションの時間があっという間だった、といった感想が聞かれました。竹内勝徳会長をはじめ、ご参加を賜りました KALS 会員の方々には厚くお礼申し上げます。

また日本ナサニエル・ホーソン協会 40 周年記念論文集『ロマンスの倫理と語り——いまホーソンを読む理由』(西谷拓哉・高尾直知・城戸光世編著、開文社出版)が2023年5月に刊行されております。表紙は高尾先生による素敵なデザインです。拙著も掲載いただきました。7月5日(水)~8日(金)には京都において第9回となるヘンリー・ジェイムズ国際学会が日本で初めて開催されましたので合わせてご報告いたします。海外からも多くの研究者が参加され、暑い時分でしたが充実した時間を過ごされたようです。私自身はパネルの司会と研究発表の機会をいただきました。

## 2022年度九州アメリカ文学賞 結果および講評

秋好 礼子 (福岡大学)

### 九州アメリカ文学賞

該当者なし

(講評)

残念ながら、2022年度は応募がありませんでした。2023年度に応募要領は、次号の Newsletter に掲載予定ですが、2024年2月20日締切で、英語4,000字以下の論文を募集する予定です。学部

生、大学院生の多くの皆様のチャレンジをお待ちしています。また、学生をご指導の先生方、本賞を広くご紹介いただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

## 日本英文学会九州支部第76回大会のお知らせ

日本英文学会九州支部第76回大会は、10月14日（土）・15日（日）に、宮崎大学木花キャンパスにおいて開催されます。アメリカ文学部門は、小林 正臣先生（琉球大学）、高橋勤先生（九州大学名誉教授）、Liu Hui さん（福岡大学大学院博士後期課程）が発表されます。

シンポジウムについては、「19世紀アメリカ文学研究からケア倫理に応答する」というタイトルで、司会・講師 生田 和也先生（長崎外国語大学）、講師 内堀 奈保子先生（日本大学）、江頭理江（福岡教育大学）、コメンテーター 小川 公代先生（上智大学）というメンバーにて行われます。

★多くの方々のご参加をお待ちしています。

## 九州アメリカ文学会9月例会のお知らせ

日時：2023年9月2日（土）14:00-17:00

場所：九州工業大学 戸畑キャンパス 総合教育棟 C-2F 講義室

【プログラム】 14:00 開会

14:10-15:10 研究発表①：大野瀬津子（九州工業大学） 「“Oratory Was the One Branch of Literature”——アメリカにおけるスコットランド道徳哲学・修辞学の盛衰——」

15:20-16:20 研究発表②：竹内勝徳（鹿児島大学） 「終末論としての“Billy Budd”」  
研究発表①,② 司会：鈴木一生（九州工業大学）

16:30-17:00 科研費申請書作成セミナー 講師：竹内勝徳（鹿児島大学）

★日程が迫っておりますが、多くの方々のご参加をお待ちしています。

## 「アメリカ文学と終末論的想像力」シンポジウムご報告

7月16日（日）、九州アメリカ文学会と江頭理江研究室の共催で、「アメリカ文学と終末論的想像力」をテーマとしたシンポジウムが開催されました。北九州市立文学館の素晴らしいステンドグラスの光の中、充実した内容のプログラムとなりました。

鈴木一生（九州工業大学講師）

「訪れない救いを待つ——メルヴィルによる黙示録の変奏」

齊藤園子（北九州市立大学教授）



「個人と社会の相克の彼方——Henry JamesとKate Chopinの作品をもとに考える「自由」のゆくえ」  
城戸光世（広島大学教授）

「終末後の世界におけるサバイバル術 ——アメリカ版ポストアポカリプス文学を再考する」  
巽孝之（慶應義塾大学名誉教授・慶應義塾ニューヨーク学院長）

「アメリカ大統領と終末論的想像力」

★このシンポジウムのご報告を大島由起子先生からいただきました。

## 特別企画「アメリカ文学と終末論的想像力」雑記

大島由起子（福岡大学）

NEWSLETTERの江頭理江先生からのご報告にあるとおり、江頭研究室との共催で、特別企画シンポジウムが開かれた。祇園太鼓が小倉の街で何時間も響いていた7月16日だった。

登壇者である鈴木一生は、Melvilleの*Pierre*を『黙示録』を下敷きにした啓示文学の側面を持ち合わせると論じた。齋藤園子は、Henry JamesとKate Chopinの女性人物について、個の「自由」と、それを制約してかかる社会との相克を論じた。城戸光世は、20終末後のポストアポカリプス文学を主に宗教の観点からCormac McCarthy論を交えながら縦横に論じた。一言で終末論といっても様々なアプローチがあるものだ。

盛会だった。夏に帰国中の、現・慶應義塾ニューヨーク学院長の巽孝之の招待登壇とあって、関東や関西から駆けつけた聴衆が4名以上おられた。私事になるが、シンポジウムのレジュメを読むと複数の登壇者が扱う予定だったので、私は前日にSacvan Bercovitch著*The American Jeremiad*(1978)を急いで引っ張り出した。難解なことを概ね2~3行の短文で小気味よく簡潔に論じていく文体に数十年ぶりに接して、ふだん長文やら批評用語に苦しんでいる私は瞠目した。また、バーコヴィッチは、Perry Millerを敬愛しつつも、ミラーはピューリタニズムの肯定感や心の高揚を把握できていないと主張する。大御所を超えようという若きエネルギーにも打たれた。シンポジウムで巽が、終末論というものは、地獄図のような世界の終わりを示すだけでなく啓示という肯定的な明るさと対になっているので両者を押さえなければならないと述べたことが、妙に納得できた。米文学のバックボーンたるユダヤ教やキリスト教についての勉強不足を反省することしきりの午後であった。なお、巽の講演内容とも関連する論集『アメリカ文学と大統領—文学史と文化史』（南雲堂）が、この8月に上梓された。

北九州市立文学館は、九州アメリカ文学学会大会での鹿児島大学の稲盛会館に続き、異界を思わせ、終末論的想像力の壮大さを伝えるのにふさわしい会場であった。

## 事務局からのお知らせ

1. 2023年度日本アメリカ文学学会第62回全国大会は、10月21~22日、札幌学院大学（江別キャンパス）で開催されます。

2. 日本英文学会第 76 回九州支部大会は、10 月 13～14 日、宮崎大学で開催 されます。
3. 九州アメリカ文学会第 68 回大会は、2024 年 5 月 18～19 日に開催 されます。(開催校は未 定)
4. 今年度も引き続き学会事務局は福岡大学に置かれています。

〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1 人文学部内 九州アメリカ文学会 TEL (092) 871-6631  
会費に関する問い合わせは高橋美知子先生(mtakaha@fukuoka-u.ac.jp)、 会費以外の件に関する 問い合わせは大島(oshima-y@fukuoka-u.ac.jp) までお願いいたします。 (大島由起子)

### 編集後記

KALS 会員の皆様、大変長らくお待たせしました。NEWS LETTER67 号をお届けします。今号 も大変充実した内容となっています。原稿をお寄せくださいました皆様には、心からお礼を申し上げ ます。

新型コロナの 5 類感染症移行後の社会は、もとの状況を取り戻しつつあるように見えますが、世 界は明らかに違う色をまとっているはずです。アメリカ文学研究を通して、世界を見つめなおすこ とが、今改めて強く求められているように感じる日々です。

NEWSLETTER 担当 江頭 理江 (福岡教育大学)